

Title	新出『葵の二葉』『底の玉藻』及びその周辺資料について
Author(s)	福田, 安典
Citation	詞林. 1999, 26, p. 68-74
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67439">https://doi.org/10.18910/67439</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 新出『葵の二葉』『底の玉藻』及びその周辺資料について

福田 安典

愛媛大学附属図書館では、昭和六十一年に白方勝氏のご尽力により、愛媛県松山市興居島の堀内家から資料一括の寄託を受けた。この資料を文学関係のものを堀内文庫、歴史関係のものを堀内文書と別に分け、現在は堀内文庫のみが附属図書館に所蔵されている。この文庫の第一の特徴は地域文学資料としての価値であるが、幕末の源氏物語研究書『葵の二葉』『底の玉藻』の新資料を含んでいる点でも看過されるべきではない。平成十一年に、大学院の学生と堀内文庫の整理を行い、「愛媛大学附属図書館寄託『堀内文庫』目録」（愛媛大学附属図書館編）としてまとめたが、その際に新資料を確認することができたので、本誌を借りて爰に報告し、あわせて『葵の二葉』の成立過程についての私見を加えて大方のご教示を賜りたいと思う。

順序として、まず『葵の二葉』『底の玉藻』についての従来

伊予の堀内昌郷の『葵の二葉』（十八卷、天保十一年・一八四〇）および『底の玉藻』十卷、さらにその二書をその子匡平が要約した『源氏物語ひも鏡』（安政六年・一八五九刊）がある。前半は『源氏物語』の人物の性格論、後半はモデル・準拠論で、すこぶる異彩をはなっている。すなわち、その人物論において対照的に諸性格を評したのは、師藤井高尚を感嘆せしめ、モデル・準拠論で当時の史実と精緻な対比・考証をおこなっているのは、近代の源氏学者に強い示唆を与えた。ただ、その評論の根底に教戒観をぬけきれない点があるのを遺憾とされている。

氏は評論史の枠組みで、この二著及びその要約である『源氏物語紐鑑』を捉えられている。また重松信弘氏は「新攷源氏物語研究史」において、かなりの紙教を割いて堀内昌郷の学に触れられ、『葵の二葉』は説く所の趣意は一種の教戒説であり、吟味考究に努めているが、穿鑿にすぎることがあるとされ、『底の玉藻』は準拠説で、もともとは『葵の二葉』の

一部であったことなどを説かれている。「源氏物語紐鏡」については、稲賀敏二氏が「こういう対比の方法で物語を見るやり方は、既に中世から「源氏物語人々の心くらべ」などで行われてきたものであるが、その比較へ主体的な倫理的価値判断を持ち込んだ所に特色が見られよう。」(和泉書院刊「源氏物語紐鏡」解題)とされる。詳しくはこれら諸先学の解説を参照されたい。

作者の堀内昌郷は、寛政三年生、幼名猶蔵、のち五兵衛、松蔭、三稜と号す。伊予興居島で、長郷の子として生まれる。父について国学を学び、長ずるに岡山の藤井高尚に師事、和歌は石井義郷(村田春海系海野遊翁門人)に学ぶ。源氏物語の研究を志し、天保十一年「葵の二葉」を著す。この書は本来は大部のものであった。重松氏の言われるように、やがて準拠部を独立させ「底の玉藻」とした。重松氏は前掲書において、昌郷の学問を江戸時代後期の研究の中の「準拠及び評論」に分類されたが、堀内文庫には年立てや系図も確認できる。また「底の玉藻」にも年立ての記載があるので、昌郷の学を準拠及び評論にだけ限定することには問題がある。

さて、その「葵の二葉」「底の玉藻」については、従来京都大学文学部蔵本(以下、京大本)のみが唯一の伝本とされてきたが、愛媛大学附属図書館本(以下、愛大本)が新たに確認できた。京大本との関係を考えるために、それぞれの書誌を示す。まず「葵の二葉」から記す。

○京大本 写本 堀内昌郷筆 天保十一年写

大本 十八卷十八冊(巻十一欠)

深緑になでしこ表紙 二十五・七纏×十八・〇纏

外題 (巻一のみ。直書き)「葵の二葉」

内題 「葵の二葉」

柱刻 「葵の二葉(直書き) 松蔭書窓(刷り)」

○愛大本 写本 堀内匡平筆 安政四年写

大本 十八卷十九冊

縹色表紙 二十六・六纏×十八・五纏

外題 (貼刷り題箋 子持ち枠「葵廼布当葉」など

内題 「源氏物語葵二葉」「源氏物語葵廼二葉」

柱刻 なし

京大本を昌郷の筆、愛大本を子息匡平の筆としたのは、筆跡が違うこと、京大本の柱刻「松蔭書窓」のある料紙が昌郷の専用紙であること、愛大本には匡平の序文が付されていることなどに拠る。更には整理の段階で海老原剛史君が親子による「巻」の字の書き癖の違いを見つけ、それによっても確認した。愛大本が発見された当初は、愛大本も昌郷自筆だとされたが(「愛媛文学手鏡」、訂正しておく。京大本と比較すると、記事や文辞に異同と出入りがある。特筆すべきは、

京大本に欠けている巻十一を愛大本で補うことが出来る点である。また愛大本は、恐らくは京の書肆に特注した刷り題箋を持ち、この翌年の安政五年に堀内家の対外的研究書「源氏物語紐鏡」を完成（出版は安政六年）していることから、愛大本は完成形態に近い本文であることが推測できるが、このことは後述する。京大本によつてなされた従来の解説は、愛大本をもあわせた形で是正されるべきであろう。本稿をなす所以である。但し、後述するように、愛大本はあくまでも完成形態に近いだけであつて、完成形態ではない。

○京大本 写本 堀内昌郷筆 天保十一年写

大本 十巻十冊

深緑になでしこ表紙 二十五・七種×十八・〇種

外題 なし

内題 「源氏物語底の玉藻」

柱刻 「底の玉藻（直書き） 松蔭書窓（刷り）」

○愛大本 写本 堀内昌郷筆

大本 十一巻十冊（巻九欠）

共表紙 二十六・五種×十八・三種

外題 （貼り書き題箋 無粹）「底の玉藻」

（直書き）「準扱一」

内題・柱刻ともになし

○愛大本 写本 堀内匡平筆

大本 一冊（巻一のみ）

共表紙 二十七・六種×二十・六種

外題 （直書き）「源氏物語底廻玉藻 一」

内題 「源氏物語底の玉藻」

柱刻 なし

「底の玉藻」は新たに二本確認できた。前述の「葵の二葉」と同様に、料紙や筆跡と書き癖によつて判断し、それぞれを昌郷と匡平筆にした。京大本「葵の二葉」「底の玉藻」の二本は、製本上、表紙、料紙ともに同体裁で、ある時期の昌郷の完成形態を示すものと考えられる。一方、愛大本「底の玉藻」は昌郷筆本も表紙を付けない草稿段階のもの、匡平筆のものも先の愛大本「葵の二葉」ほどの完成形態とは思えず、また巻一のみを零本であつて、現時点では「底の玉藻」については京大本による従来の説で問題はない。愛大本の方の昌郷自筆本はその草稿、匡平筆本は単なる書写段階の一本である。以上が新出「葵の二葉」「底の玉藻」の報告であるが、この二書以外にも「葵の二葉」関係の資料を確認することができたので、併せてここに報告する。

「源氏物語秋の雨夜」（天保十一年写、写本、昌郷筆、大本十八

卷十六冊、卷十・十四・十五欠は、昌郷の筆であり、卷一の内題「秋の雨夜」を「葵の二葉」に朱筆訂正していること、後述するが藤井高尚に見せたとする識語が貼り紙で訂正されていることから、「葵の二葉」の前段階、基礎資料として注目される。また、未完成ながら「葵の二葉付録」として古岡平安京名所添文、「葵の二葉拾遺 もろかつら」の断章が見つかり、堀内家の学の発展方向を認めることが出来る。その他、草稿類が数多く残され、昌郷・匡平の二代をかけた源氏物語研究の苦心の跡、二大著が完成するまでの過程を見ることが出来る。そこで、これらの資料を踏まえて「葵の二葉」の成立過程をたどってみたい。

愛大本「葵の二葉」匡平序文に（傍線・括弧・句読点は筆者、以下同）、

○此書ども一わたりかきとぢめて、藤井翁に見せまゐらせしに、「いとめづらかに考へ出たり。」とていたくめでられしが、やがて「葵の二葉」「底の玉藻」と名づけられたり。

とあり、本来一括した著書であったものを、傍線部のように藤井高尚に見せたところ、「葵の二葉」と「底の玉藻」の二つに分けるよう教示されたという成立事情が記されている。この事情については、昌郷自身も、

三十巻ばかりもあるを、思ひひがめたることもやあらむと、松の屋の藤井翁に見せ参らせて、そのさだめをこひしに、師のいはく、「いとめづらかにもかうがへ出しものかな。（中略）か、れば、こはそのふたつむかはる所を名として「葵の二葉」とすべし。そのよしを、まろはしがきにもせむ。」とていたくめでられきと。（源氏物語紐鏡）所載跋文

と記している。昌郷は当事者だけあつて詳しく、高尚に持ち込んだ冊数が三十巻ばかりであつたとも記している。これが、「葵の二葉」成立の第一段階である。

以後は各本に付される昌郷跋文の記載によるが、かなり複雑である。まず、昌郷跋文は「秋の雨夜」付載の系列（仮にA系列）と刊本「紐鏡」付載の系列（仮にB系列）の二つがあり、両者は全く異なる。もちろんA系列が先行する。A系列は、

今宵は。思ひかけずも。此物語のことどもを。いひ出て。いともく。長物語になりて。夜も明ぬべし。

という書き出しで始まり、客人の前で源氏物語について物語る内に、長くなって夜が明けたという。続いて「宵の雨雲い

づち行けん」とあつて、このA系列跋文は本来は「秋の雨夜」という題名を説明するものであつた。末尾に、

かくさまにものせしせつどもよしあしやは。ゆかりまがはぬふぢ井翁にとて、ふでとりてかきせるものは、梓ゆみ伊予国としの□□(二字虫食い)も、えさしそふ松やまの千代のみかげにかくれすむ 堀内昌郷

天保十一年

とあつて、天保十一年に藤井高尚に閲覽を乞うた時の跋文であつたことを知ることが出来る。高尚はこの時に、その書を二つに分け、それぞれを「葵の二葉」「底の玉藻」と命名した。昌郷はその示教により「秋の雨夜」をまず朱書きで訂正して「葵の二葉」としたのである。その際、この跋文にも朱を入れ、

かくさまにものせしせつどもよしあしやは。人の定めんとて、天保十とせあまり一とせといふ年の卯月の頃、ふでとりてかきけるものは、梓ゆみ伊予国としの□□(二字虫食い)も、えさしそふ松やまの千代のみかげにかくれすむ 堀内昌郷

天保十一年

とした。傍線部が訂正箇所である。即ち、藤井高尚に見せたという記載を削除し、この書の成立を天保十一年四月としたのである。この訂正によつて、高尚閲覽という事情が不明となり、本来は秋に成立していた本書が四月の成立ということになつてしまつた。さらにこの記事の上に、貼り紙で、

かくさまにものせし説どもを、人々はいかに思ふらん。そはしれど一わたりはとて、天保十とせあまり一とせといふ年の卯月の頃、ふでとりてかきけるものは、梓ゆみ伊予国としの□□(二字虫食い)も、えさしそふ松やまの千代のみかげにかくれすむ 堀内昌郷

天保十一年

と訂正する。計二度の訂正がなされたのである。京大本「葵の二葉」もこの最終案が採用されている。従来、京大本により本書の成立は天保十一年四月とみなされてきたが、如上の通り本書は当初、秋に成立しているのであつて、四月ではない。先に京大本の資料としての疑義に触れたが、京大本の記載から記された先行の説明書は改められるべきであらう。すなわち、天保十一年四月は藤井高尚から「秋の雨夜」が戻され、訂正を施した年月日であつて、成立の年月日ではないのである。原形態「秋の雨夜」は恐らくは天保十一年以前の秋日に成り、京大本「葵の二葉」は天保十一年四月から起筆さ

れ、その数ヶ月後に成立したのであろう。

愛大本「葵の二葉」にはこの末尾がなく、ただ「天保十一年八月 伊予国 堀内昌郷」とのみある。これは、昌郷の浄書が完成した年月日を示すのではないだろうか。四月から浄書を始め、八月に完成するというのは時間的に矛盾はない。とすると、「葵の二葉」の正しい成立時期は、天保十一年八月ということになり、資料としては愛大本の記載の方が京大本よりも信頼がおけることになる。

ところが、「葵の二葉」には別にB系統の跋文がある。これは刊本「紐鏡」に付されたもので、「殿上の人々のなかにもほめはやして」という書き出しから始まり、藤井高尚の示教と命名の件りのあるものである。A系統が本来「秋の雨夜」の為に作られた跋文を転用したのに対して、B系統は「葵の二葉」の為に作られた正統なものである。しかし、京大本にも愛大本にもこの跋文がないことに問題がある。両書ともに蔭丁に意を込め、その時点での完成したものながら、何故にB系統の跋文を有さないものであろうか。また、B系統は「天保十四年九月 伊予国 堀内昌郷」とある。これらの事実を突き合わせてみれば、「葵の二葉」は天保十一年八月に一応の完成を見たものの、その後にもさらなる改訂を施して、天保十四年九月に完成したと考えざるを得ない。嗣子の匡平が父の学を顕彰すべく、安政五年十月に「紐鏡」を編む際に底本に採用したのは、天保十一年八月に完成した京大本でも愛大

本でもなく、天保十四年九月に完成したB系統の跋文を持つ散逸した「葵の二葉」であった。ただ気になるのは、愛大本の書写期は安政四年九月であるということである。匡平は「紐鏡」刊行の準備を進めながら、何故に底本とは別系統の愛大本を書写したのだろうか。後考を期したいと思う。

以上の成立の過程を、図示すれば以下の通りになる（内は現在散逸、想定諸本）。

草稿・メモ段階

←

昌郷、「源氏物語評論書三十卷」成立。

← ←  
（或いは「秋の雨夜」十八巻と愛大本「底の玉藻」十一巻をあ  
わせた二十九巻をおおまかに三十巻としたか。）

←

天保十一年四月以前に藤井高尚に提出。二つに分けられ、「葵の二葉」「底の玉藻」と命名。

←

天保十一年四月、「秋の雨夜」を訂正。

←

天保十一年八月、訂正版「秋の雨夜」を浄書して京大本「葵の二葉」成立。同時に京大本「底の玉藻」成る。

←

天保十四年九月、「葵の二葉」完成（刊本「源氏物語紐

鏡【底本】。

←  
←  
安政四年九月、匡平、愛大本「葵の二葉」浄書。

←  
←  
安政五年十月、「紐鏡」草稿成る。

←  
←  
安政六年秋、「紐鏡」刊行。

想定した以外の諸本が存在するかもしれないが、堀内文庫の整理が終了した現時点で、管見に及んだ範囲での成立過程を示しておくことで、本報告を終えたいと思う。

注

(1) 詳しくは、拙文「寄託図書 堀内文庫について」(愛媛大学附属図書館「図書館だより」第五十七号)、「愛媛大学附属図書館寄託『堀内文庫』目録」解説を参照されたい。

(ふくだ・やすのり 愛媛大学助教授)